

最終講義「私の哲学人生 —まだ語っていなかったこと—」

伊 坂 青 司

先ほどは司会の上原先生から私の経歴について、また兼子学長からは私にとりまして過分なご挨拶をいただきましてありがとうございます。そして今日はこんなに多くの方々にお集まりいただき本当にありがとうございます。

今日の最終講義のテーマは「私の哲学人生」ということで、〈私〉というものにこだわってお話をさせていただきます。高校時代から現在に至るこれまでの、そしてこれからの〈私〉の哲学に関わるお話ということでご了解ください。「まだ語っていなかったこと」という副題をつけましたが、かなりの部分は何かの機会に語っていますので目新しい話ではないかとは思いますが、まだ語っていなかったことも交えながらお話をさせていただきますと思います。

1 哲学人生の始まり—高校時代

まず私の哲学人生の始まりを振り返ると、高校時代に遡ります。最初に哲学にモチベーションを持ったのは、高校二年生くらいの時です。その時に「何のために生きるのか」という問題にぶつかりました。言ってみれば生きることの意味ということです。哲学は懷疑から始まるということは何

人かの哲学者が語っているわけですが、まさに私はこの問題にぶつかりました。生きることへの疑いといいますか、懷疑からまず始まったということでございます。

最近ある人と話をしていたら、哲学をなぜ始めたのかと問われて、実は「何のために生きるのか」という疑問にぶつかって、そこから私の哲学が始まったという話をしました。そうしたらその人に、それはちょっと贅沢な悩みじゃないですかと言われました。ただ私がこの疑問にぶつかった時はそういう余裕など全くなくて、まさにその問題を抜きにしては人生をそのまま歩んでいけないという切羽詰まったものでした。この問題はその後の私の人生にとってまさに出発点であり、そして今に至るまで私の哲学の足場になっている部分です。

最初どのように哲学をしていったらいいのか全く分からず、手探り状態でした。何のために生きているのかを高校の教師に聞いても答えは絶対に得られませんので、手探りで色々な哲学書を乱読しました。阿部次郎の『三太郎の日記』や西田幾多郎の『善の研究』など、日本では当時、哲学を目指す人たちは大体こういうものを読んでいたものです。外国のもものではドイツの哲学者ニーチェが書いた『ツァラトゥストラはこう語った』や、キルケゴールの『死に至る病』など、こういうものを手当たり次第に読んでいたという根暗な青年でした。これではモテルわけないですよ。当時は実存主義というのが流行っていて、実存、つまりこの〈私〉というものに対する問いが色々語られていました。そして『死に至る病』という本などを読みながら、「いつ死のうか」という死への誘惑が当時の私には常にありました。

そんなこんなで高校二年から三年までを過ごしたので、受験勉強など手につくわけがなく、大学を受けはしたんですが見事に落ちました。それととにかく京都大学に入って哲学をしようと思い、京都で浪人生活を一年間

送りました。その時に、先日亡くなられた梅原猛さんとちょっとした切っ掛けで知り合いになり、梅原さんも当時立命館大学を退職して文筆活動に入っていたので「自分も浪人だ」ということで、一年間自由に色々な話をしました。最初は京都大学を目指していたのですが、梅原さんが「京都大学の哲学はアカデミズムの牙城なのでやめておいたほうがいい」ということで勧められたのが東北大学でした。「なぜですか」と聞いたところ「これからは中国の時代だから」と、そして「東北大には有名な中国哲学の権威がいるのでぜひ東北大学に行きなさい」と言われました。後からわかったのですが、梅原さんは仙台出身だったんですね。そういうこともあって東北大学を勧められた。中国哲学を勧められたのは、これからはヨーロッパではなくて中国の時代だということを、梅原さんは当時すでに先見の明で予見していたんですね。当時の梅原さんのデビュー作が『地獄の思想』という日本思想に関する著作で、そういう影響が私の日本文化への関心とどこかで繋がっているんじゃないかなと今でも思っています。

2 大学時代の転機

高校時代は暗い青年でしたが、1968年に大学に入って大きな転機がありました。同じ世代の人たちは似たり寄ったりの経験をしていると思いますが、その年というのは学生運動が盛り上がり始めていて、私が属していた50人のクラスで48人くらいがデモに参加していたという時代でした。ベトナム戦争ではアメリカ軍が日本の基地から飛び立っていましたから、そのベトナム戦争に対する反対運動や、また権力が大学に介入してくる時代でしたので、そうした中で自分なりに、平和と大学の自治を守るという行動原理が身につきました。これは今でもブレずに私の一つの信条になっていると思います。

高校時代とは大きく違って、激動する社会の中で〈私〉という殻を破って社会的な視野というものを自分で持てるようになったというのが、私の大学生活の中での一番の転機になりました。〈私〉の哲学も、「実存としての〈私〉」から「時代の中の〈私〉」という視点に転じていきました。〈私〉という一つの閉じられた世界ではなくて、時代というものの中で自分というものが存在しているという方向がだんだんと見えてきたということです。

ここでヘーゲル哲学が私にとっては身近になった理由の一つに、東北大学が当時ヘーゲル哲学研究のメッカだったということがあります。ヘーゲル研究者は私の世代では非常に多いのですが、その中でも東北大学は一つのメッカでヘーゲル哲学に接することができたということです。それで当初予定していた中国哲学からドイツのヘーゲル哲学に転じた経緯があり、結果的には梅原さんの期待を裏切ったことになります。

1972年ごろからだんだん大学紛争が収まっていて、学内のそうそうたる教員同士でドイツ語の原文で読んでいた『世界史の哲学講義』の輪読会に、学生の私も参加させてもらいました。これが私にとってはヘーゲルの原文テキストを解読する大きな経験になりました。そしてこれが最近の仕事であるヘーゲルの『世界史の哲学講義』の翻訳にも繋がったことになります。

3 東北大学大学院（1974年～1981年）／

神奈川大学（1984年～2019年）

大学院では『精神現象学』というヘーゲルの主著の研究を行ない、それがその後『ヘーゲルとドイツ・ロマン主義』という私の博士論文にも繋がっていくことになります。その『精神現象学』のテーマは、意識が世界精神をどう「経験」していくかというプロセスを描くことにあります。〈私〉

から始まって意識が世界との関わりの中で色々な「経験」を重ねながら形態変容していくというのが『精神現象学』の方法です。これが私自身の経験とも重なって、その後の私の哲学の方法にもなっていったということです。

大学院での研究は、『精神現象学』を中心としたいいわゆる下積みの文献研究です。ただしそれだけでは完結しません。『精神現象学』には引用文がほとんどなくて、従ってヘーゲルが当時の哲学者の言っていることを自分なりに解釈しているために、何が元になっているのかわからない仕組みになっています。参考文献も引用の箇所も示されないという、今で言えば実証性のない全くダメな著作です。そこで謎解きをしなくちゃいけないのですが、この謎解きが非常に面白かった。ヘーゲルは当時の思想潮流をなしていたドイツ・ロマン主義の流れの中で自分なりの哲学を形成していて、その中にはフィヒテやシェリングといった哲学者、その他有名なゲーテなどドイツ思想界のそうそうたるメンバーが同時代を生きていたんですね。このような思想状況が『精神現象学』の背景になっています。ヘーゲルはドイツ・ロマン主義の中で思想形成しながら、ドイツ・ロマン主義から袂を分かち、批判を始めます。とりわけシェリングとは同じ学生寮で生活していて最初は仲が良かったのですが、ドイツ・ロマン主義の中心メンバーになったシェリングとの関係が悪くなっていきます。そしてシェリングの哲学を批判したのが『精神現象学』の序文なんですね。

シェリングはこの『精神現象学』をヘーゲルから贈られて、その序文を読んで激怒します。シェリングという名前は一切挙げられてはいないので、それを読めば自分のことだとわかるような批判で、シェリングはそのあとヘーゲルとの交流を断ち切ってしまいます。これがドイツの哲学者の世界なんですね。日本の哲学界ではなあなあの関係が多いですが、自分が足場にした思想を超えていくというのが大体ヨーロッパの哲学者たちの

やり方なんです。

私は1984年に神奈川大学に赴任して、5年後の1989年に一年間ミュンヘンで在外研修をする機会をいただき、さらに1999年に同じミュンヘンでの3ヵ月の短期研修中に『ヘーゲルとドイツ・ロマン主義』というテーマで博士論文を仕上げました。日本に帰ってきてすぐ御茶の水書房の社長に「今こんな計画を持っているんだけど出版してもらえませんか」と直談判したところ、二つ返事で「ああやりましょう」というので快く引き受けていただいて、2000年にこれを出版することができました。

各章の目次だけ挙げておきますが、「愛」「神」「自我」「生命」「精神」「国家」という非常に幅広いテーマでヘーゲルが当時のドイツ・ロマン主義と切り結んで哲学をしていたのがよくわかります。それに従って自分なりにこういうテーマでそれぞれの章をまとめたということです。ちなみにこの本は三刷くらいになっています。最初これを献本で色々な人に送りましたら、何人かから礼状が来て、中身のことはほとんど触れずに「カバーが美しいですね」というお褒めの言葉もありました。実はこのカバーは、私が気に入っているフリードリヒというドイツ・ロマン派の画家の絵です。

4 ゼミナール活動

さて神奈川大学での話に戻りますが、ゼミナール活動が私にとっては非常に大事な活動ということになります。1985年から2018年まで約30期の卒業生、350人ほどの卒業生を出しております。私はゼミナールではテキストを輪読するというスタイルは一切取りませんでした。哲学の専門家を養成するということを考えていなかったものですから、とにかく学生が主体となって自分のテーマを持って本音で討論をするというのが、伊坂ゼミナールのやり方です。本音が出てくるまで一年くらいはかかります。毎

回何を討論テーマにするのかをぶっつけ本番で決め、みんなが今ぶつかっている問題を本音で語り合うというやり方です。

当時は「ゼミの神大」ということで全国的にも有名だったわけですが、それはなぜかという少人数教育で、しかも学部を超えてゼミ生が集まってくるというのが非常に珍しかったんですね。他の大学では各学部ごとにほとんどクローズドされたゼミですが、神奈川大学の場合オープンで、私のゼミには経済学部、法学部、外国語学部、場合によっては工学部からも参加してくれました。

ところが神大のゼミも次第に学部単位になり、また12年前に外国語学部国際文化交流学科が立ち上がってから、学部・学科単位的な傾向が強くなりました。私のゼミは最初どちらかという思想系で、時代の問題を論じるというものでしたが、国際文化交流学科の学生の関心や私自身の関心もあって、芸術系のゼミになってきております。私は小学校時代から油絵を習っていて、何を隠そう中・高・大学では美術部員だったんですね。そんなこともあって、芸術系のゼミとして、私の趣味半分もあってゼミで美術館巡りをするという贅沢なこともやっております。

伊坂ゼミナールの活動の成果は、ゼミ誌「PHILOSOPHIA」としてまとめられています。最初からこの名前で、今年でちょうど30号で完結ということになります。『神奈川大学史紀要』が2016年に創刊号を出すのでゼミのことを書いてくれないかという依頼があり、ちょうど良い機会だったので「PHILOSOPHIA」の創刊号から27号まで読み返して、「「ゼミの神大」の伝統と現在」というタイトルでエッセイを書かせてもらいました。「PHILOSOPHIA」の目次を追って見ていくと、ゼミ生はその時代その時代の最先端の問題を論じているんですね。これは後から見て本当にびっくりで、後からでないとなかなかわかりませんが、ゼミ生はみんなやっぱりいい感性をしていたんだなという思いです。

5 神奈川大学での講義

次に神奈川大学での講義についてです。1984年に私は一般教育の哲学の教員として神奈川大学に赴任してきましたので、最初は教養系の哲学、そして教職関連科目の哲学概論、西洋哲学史の講義を担当しました。ただ最初は私自身まだ自分の哲学ができていなかったんですね。哲学をよくある教科書的な西洋哲学史のように、哲学者のそれぞれの哲学を時代を追って羅列していくような講義をしていました。講義していて自分としてもあんまり面白くなかったわけで、ある学生が講義が終わったところでつかつかと教壇のところまで来て、「先生の哲学を語ってください」と言うんですね。今の学生はおとなしくなっていますが、こう言える学生が当時はいたんですね。私の哲学を語っていなかったなということで愕然として、自分の講義を根本的に見直すことにしました。

ちょうど教養系科目の見直しが1991年から全国的に始まり、教養科目の単位を減らして専門科目を重視するという文科省の大綱化の方針に則って、教養系の哲学も多くの大学では「哲学」という名称をどんどん変えていきました。神奈川大学では基本的な教養科目は哲学も含めてちゃんと残そうという議論をして、そういう基本方針のもとで改革を進めました。教養科目の単位数が全体として削減されたので、今までは通年科目だったものを半期の科目にして出来るだけメニューを増やそうと考えました。学生にわかりやすいようにということで議論して、教養科目については副題をつけることにして、例えば私の場合では「哲学」を「愛の哲学」と「生命の哲学」というように二つに分けて、半期ずつに開講するというようにしたわけです。なぜ「愛の哲学」にしたかといえば、愛に懐疑を感じ始めていたからなんですね。まさに懐疑から哲学が始まるということなので、一

番自分にとっての切実な問題をテーマに設定しました。「愛の哲学」は当時同僚から「そんなテーマでようやるなあ」というような反応で、冷たい目で見られました。しかし雑誌社が嗅ぎつけてきて取材を受けました。その雑誌で付けられたタイトルが「愛の哲学講義革命」で、当時の講義としては革命的だったんですね。それから「生命」については、環境問題や生命倫理の問題など当時の大きな問題になっていたということでテーマにしたわけです。

6 「愛の哲学」の中間的結論

私の「愛の哲学」ですが、実は現在まだ結論は出ていないんですね。結論が出ないまま終わらざるを得ないということで、今日はただ中間的結論ということでお話をさせていただきたいと思います。私は愛のプロセスを「依存・分離・対立・自立・共生」という5つのキーワードで類型化して理解しようと考えました。ただこの5つの段階はそれぞれが独立しているわけではなく、愛というのは個人史（一人ひとりの歴史）の中でこの5つの段階を経てメタモルフォーゼ（形態変容）してゆく、つまりそれぞれの個人の人生の中で形を変えていくという仮説を立てました。これは私のオリジナルです。愛のメタモルフォーゼということで、最初は乳幼児期の母親への依存（愛着）から始まって、そのあと少年・少女期に親からだんだんと分離をしていきます。それから父親や母親との対立から青年として自立へと成長していきます。ただ最近の若者は親と非常に仲がいいので、親と対立するということはあまりないんですね。その対立を経験しないと自立にもなかなか繋がらないという問題は含みつつ、自立に向かう個人二人が恋愛し、結婚をして共生という段階に移っていきます。以上は個人が生まれてから死に向かうまでの愛のメタモルフォーゼを念頭に置いています。

これはあくまでも理念型としてのメタモルフォーゼで、時代の変化によってもなかなかそのまま当てはまりにくくなっているという気はしますが、一応これを類型として頭の中に入れておくと、自分が、あるいは自分の子供が今どの段階にあるのかということを理解できるようになると思います。

私はもう一つ、個人史と社会史にはどこかで共通した対応関係があるのではないかという仮説を立てました。講義でもその仮説を立証するという事で愛の社会史についても色々論じはしましたが、なかなかうまくはいきませんでした。個体発生は系統発生を繰り返すという生物学の用語がありますが、生物のようにそううまくはいかない部分があります。この後まだ考えていなくちゃいけないということで、今日はとりあえず的中間的結論としました。

社会史の例を一つ挙げれば、母親への依存という個人史の段階が、原始母権制社会という母権を中心に社会が成り立っていた時代と対応するのではないかという仮説です。原始母権制社会というのは、日本で言えば女性土偶で象徴される縄文時代で、母親が家族社会の中心をなしていました。それから現代の共生ということで考えると、個人は自立から他者との共生へ入っていく場合に、共同生活する中で自立性を実現することが難しいという問題にぶつかります。個人が自立性を実現しようとする共生の関係が束縛になることがあります。結婚という形態はまだ全てが崩れているわけじゃないですから、個人が自立的でありつつ、なおかつそこでお互いが協力し合うという相互協力の関係は、社会史の中の共生ということでその意味が考えられます。

個人のキーワードの一つとして最近よく話題になるのが孤独ですね。今日の朝日新聞を見ていたら、ある雑誌の宣伝に「毎日が楽しい孤独入門」が特集テーマになっていて、現代の共生を考える場合でもキーワードになっているということであるかと思います。孤立の「孤」だとネガティブな

意味が強いですが、孤独というのは孤立の「孤」ではなくて、私は最近「個独」ということで考えています。個人が「個」として独りである、すなわち自立的であるということであれば、それはかなりポジティブな意味で考えられるかなと思います。緩やかな共生関係の中でなら、このような「個独」はありうろと考えています。

最近「おひとりさま」が流行語になっていますが、これは最初出てきた時は女性のおひとりさまでした。女性が夫に先立たれておひとりさまになって、夫から解放されて自由に生きるというポジティブな意味が強かったですね。最近「男おひとりさま」という言葉も出てきて、ようやく男性のおひとりさまが問題になっています。ただ男性の場合、おひとりさまというのはネガティブな意味合いが強いわけです。妻に何かと依存していた夫が妻に先立たれておひとりさまになると、割合に早く死ぬケースが多いですね。夫と比べると、女性はおひとりさまとして長生きするケースが多いわけですが、男性もおひとりさまになることを予想して自立的になることが必要ですね。

7 恋愛の文化比較（「文化比較論（思想）」から）

ところで、国際文化交流学科で担当した科目「文化比較論（思想）」で、愛の中でも恋愛をテーマに論じました。恋愛の文化比較ということで歴史上の恋愛のあり方を見ていくと、恋愛をリードしてきたのは女性だったということに気づきました。三つほど例を挙げて見ていきたいと思います。

一つは古代の日本人の恋愛です。『万葉集』の相聞歌という恋愛を詠んだ歌に、天武天皇の皇子の大津皇子と石川郎女の歌があります。大津皇子の「あしひきの山のしづくに妹待つとわが立ち濡れし山のしづくに」（巻二 107）は、山の中であなたを待っているのに、なかなか来てくれなくて

夜露に濡れてしまった、という恨みつらみの歌です。それに対して石川郎女が「吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らしものを」（巻二 108）と返します。私を待っていてくれてあなたが濡れてしまった、その夜露に私になりたいわという歌です。夜露にぐっしょりと濡れたあなたの着物のように、私はあなたを包み込みたいというわけですから、こんな歌を贈られたら男は完全に気持ち鷲掴みされますよね。石川郎女というのは宮中の侍女ですが、それが対等の恋愛感情で、しかも大津皇子の気持ちをリードするように歌を詠んでいます。飛鳥時代というこの頃は、男性と女性は恋愛ではまだ身分上の上下がなかったんですね。

もう一つは江戸時代になりますが、人形浄瑠璃「曽根崎心中」に「天満屋の段」という有名なくだりがあります。その中の見どころは、天満屋という遊郭にいる恋仲のお初のを密かに訪れた醤油屋の手代の徳兵衛が、お初を連れて天満屋から逃げ出そうと縁の下に身を潜めている場面です。人形浄瑠璃では普通は人形の足は見えないんですけども、この場面では縁の下に隠れている徳兵衛の首のところに お初が足首を垂らして、心中する覚悟があるのかお初が徳兵衛に意思確認をするんですね。それで徳兵衛も迷いつつ、お初の足首を持って自分の首に当て、心中する覚悟だということを知させます。窮地に陥っていた徳兵衛をお初が心中へと誘っていくというように、ここでも女性の方が男性をリードしているということです。

それからジャン・ジャック・ルソーの有名な『新エロイズ』というフランス革命の前に書かれた書簡体の恋愛小説を採り上げたいと思います。家庭教師のサン・ブルーと貴族の娘ジュリの間の身分の差を超えた恋愛物語です。この二人が恋愛関係に陥って、間もなくジュリの父親にばれてしまい、サン・ブルーは解雇されて二人の恋愛は引き裂かれてしまいます。それでジュリは自殺まで考えるんですが、結局は父親が選んだ相手と結婚してしまうんですね。ジュリが家を飛び出すことはできなかったという、

そこは家父長制の時代の限界といえば限界なんですね。残されたサン・ブルーは傷心の思いで船で三年間の世界一周の旅をしてジュリのことを忘れようとしませんが、やっぱり忘れられないんですね。結局サン・ブルーは傷心旅行から戻ってきて、まだ恋心を持ったまま、ジュリが結婚して子供もいる農園を訪ねます。そうすると農園主のジュリの夫が寛大に受け入れてくれて、それでジュリとその夫そしてサン・ブルーの三人の関係の中で、サン・ブルーの中にジュリに対する恋愛でなくて友情という感情がだんだんと芽生えてくるんですね。このストーリーは恋愛から友情への昇華という方向を示していると思います。

前にゼミで友情から恋愛が生まれるかというテーマでよく議論しました。その当時には学生と同じように私にも関心があったんですが、私が今議論したいのは恋愛から友情は生まれるかというテーマです。今でもゼミで集まったら議論してみたいなと思っています。恋愛感情がいずれ冷めた場合、どういう関係として継続しうるか、友情というのはそういう一つの感情かなと最近は思っています。

8 共同研究活動と成果

さてここで話題を授業から学内の共同研究に移したいと思います。神奈川大学は共同研究の活動に恵まれている大学です。これは教員を主体とするもので、各学部に研究所があり、それぞれの研究所に共同研究グループがあると思いますが、我々ですと人文学研究所というものがあります。この研究所の中に「自然観の東西比較」というテーマで共同研究グループを立ち上げました。私自身が自然と人間関係を大きな研究テーマと考えていて、自然観の世界的な東西比較を行うということで立ち上げたわけです。人文学研究所には多彩な専門分野の教員が属していて、この共同研究グル

ープは専門領域を越えて交流ができる、私にとってはありがたい場になっています。

ただ私自身が副学長になったこともあって、上原先生に代表者を代わっていただきました。そしてこの研究グループの趣旨と活動を大学でも理解をしていただいて、学内の共同研究奨励に採用していただきました。今年で3年経ったところでようやく研究成果を出す段階になって、それが『自然・人間・神々―時代と地域の交差する場』ということで多彩な専門分野のメンバーが論文を書いております。私もその中に「世界史の中の神話と宗教」というテーマで論文を書きました。

ちょうどこの時期に翻訳をしていたのが、ヘーゲルの『世界史の哲学講義』です。これは1822/23年にヘーゲルが初めて講義した筆記録を復元したものです。そのあとこの初回講義を含めて5回講義をするんですが、中身は最初と最後で随分違います。弟子たちがヘーゲルの死後に講義筆記録をもとに編集して出版したわけですが、初回講義の内容はほとんど取り入れられずに、最後の講義が元になっています。初回講義からどんなに変わってしまったのかという違いが、ようやく初回講義の翻訳によってわかるようになってきました。今まで流布してきたヘーゲル歴史哲学の通説を覆すような内容になっています。

この翻訳がちょうど共同研究グループの活動と重なっていましたので、英国史や中国史、仏教やキリスト教、またイスラームの専門家など色々な人から私の知らなかったことについても情報を得ながらこの翻訳をなんとか完成させて、2018年の10月に上巻が、下巻は11月によりやく完成したということでございます。

9 大学役職と学問・教育との間で

ここで大学の役職と教員としての学問・教育との関連について少し話をさせていただきます。私は外国語学部長を2007年から2011年の2期4年やりました。学部長というのは基本的にいい教育をどう作っていくか、そしてそのバックになるいい研究条件をどう整えていくかという、つまり教育と研究の改善が一番の役割だと思っています。大きな改革を目指して失敗するよりは、このようなルーティンワークをしっかりとこなしていくということの方が私は重要だと思っているわけです。

私が学部長をした時は大きな改革はありませんでした。ただプロモーションといって、教員が講師から助教授、助教授から教授というように昇任していく人事についての業績審査の規程について、大幅な改定を行いました。この規程は学部ごとにそれぞれ独自に決めているんですが、当時の外国語学部には大雑把なものしかなかったわけです。エッセイまで含めて業績として上げてくるケースがあり、そこでちゃんと査読を経た論文の評価を高くしようということで、かなり緻密な議論をして規程の改定をしたというのが、私が学部長の時にやった一つです。今でも多少問題はあるにしても、教員の研究の向上に、ひいては教育の改善につながっていると思います。

それから2016年から2017年に一年間だけでしたが、兼子学長の元で副学長をやりました。特にその時に神奈川大学の将来構想をどうするかという最大の問題がありました。これまで大学全体として大きな改革ができていなかったのも、各部局での議論を踏まえて執行部で構想を策定し実現するということになりました。その一つが2020年度に開設予定の国際日本学部です。現在外国語学部に属している国際文化交流学科を国際日

本学部の一つの屋台骨として設定し、それから日本文化学科がもう一つの新しい学科になります。さらにもう一つは歴史民俗学科で、これは神奈川大学の全国的にも有名な日本常民文化研究所を母体にして開設することになります。この三学科で国際日本学部を立ち上げるというのが改革の一つです。その中でも日本文化学科に果たして学生が集まるのか気になっていましたが、この前坪井学部長と話していて、神奈川大学が高大連携をしている高校で、国際日本学部のどの学科に関心があるかというアンケート調査をしたところ、日本文化学科が一番人気だという結果が出たということで、私もちょっと安心しました。国際文化交流学科と歴史民俗学科は心配ないと思っています。

それからなんといっても最大の将来構想がみなとみらいキャンパスの新設です。みなとみらいキャンパスは横浜美術館から徒歩1分くらいの非常に良いロケーションに高層キャンパスを作り、ここに国際日本学部と外国語学部、それから平塚にある経営学部の国際系の三学部が移転することになります。その計画をはば一年で目途をつけたことは兼子学長のリーダーシップによるものであり、素晴らしい英断だと私は思っていて、そこに副学長として参加させていただいたことを非常に光栄に思っております。

それからもう一つは教養系科目の改革をどうするかという大きな課題です。みなとみらいキャンパスに移転してきて、経営学部と外国語学部の国際文化交流学科に属していた教養系と語学系の教員が合流することになり、共通教養教育の大きな改革が必要になります。おそらく学長は私にその原案を作って欲しいという期待があったと思いますが、なかなかそこまでできませんでした。ただ在任中に一つ実現できたのは教養系科目の「手話入門」の新設です。これはまだ他の大学にもあまりない科目で、いわゆる多様性の社会の中でダイバーシティについて実践的に学ぶという意義があります。実際に聴力に障害のある手話のプロに来てもらい、学生は1クラス

25 名前後の授業で学ぶことになります。学生が集まるのかという不安の声もありましたが、定員に対して 100 名近くの履修申し込みがあったのは嬉しいかぎりです。

神奈川大学の将来構想の実現に向けて一気に大きく動き出した時期は会議の連続で、ちょうどヘーゲルの翻訳の仕事と重なって、自宅に戻って翻訳の仕事をするという生活が続きました。公務と学問の時間をなんとか両立させるということで、意外とそれぞれの時間を有効に使えました。学問だけだつたといふダラダラとなってしまうものですが、会議の合間を縫って集中的に自分の仕事をするということで、かえって両立したかなと思います。会議がシビアな議論になった場合など、特にヘーゲルの翻訳に集中している時は、それが精神安定剤みたいになってかえって落ち着きました。

10 病気の経験から

しかしそうした中で持病の腰痛が悪化してしまいました。兼子学長にはよくご理解をいただき、一年間で副学長職から解放していただきました。腰痛の手術ということで、私にとって初めて二週間くらい入院しました。腰椎がずれてしまったものですから、それを元に戻して金属で固定して、なんとか今は腰痛の痛みも少し和らいではいます。

その時の手術で、〈私〉の意識が全身麻酔で完全に消失するということを経験しました。手術室に入って看護師さんから「これから麻酔に入ります」という言葉を聞いた直後に、私の意識が回復して看護師さんの「手術終わりましたよ」という声を聞きました。手術は5時間半くらいかかったんですが、その間の意識は無なんですね。時間的にも瞬時に過ぎてしまつて、つまりこれこそ意識が消失するということですね。しかし意識が消失しても、身体はそれでもちゃんと制御されて働いているということ

です。考えてみると、筋肉系は大体脳と繋がっていますので自分の意思で動かせますし、呼吸は無意識のうちにしているとはいえ、動かそうと思えば自分の意思で肺を動かせますが、意思によって動かせない身体部分は圧倒的に多いですね。消化器系や循環器系はほとんど自分の意思では動かせない。例えば心臓を自分の意思で自由に動かせるかということ、できないですよ。そうすると意外と人間の身体というのは、自分の意思とは関わりのないところで動いていて、いかに自分の意思が伝わらない部分の方が多いかということ、病床で考えていたわけです。

そうなると病気は自分の意思ではどうしようもないとも思われます。ただ人間の場合には自分の身体についてあらかじめ考えることができます。これを哲学では予料といいます。だから病気にならないようにどうするか、あるいは意思できない身体部分についてどうするかということをあらかじめ予料することができる、ということかと思えます。

死についても病床で考えたんですが、手術の全身麻酔で経験したように、意識が消失するということは〈私〉が完全に無になるということです。身体機能が完全に停止して脳も機能が停止すれば、完全に意識のない状態になるだろうと予測ができるわけです。それでは私は死んでしまえば無になるかということ、私は死んでも魂が残るというようには考えていませんが、ただ〈私〉の意識や身体は無になっても、個人としては家族や友人・知人の中で記憶されていきます。その意味では、死んでも個人そのものが無になることはないというように思っています。

11 これからのこと

さて最後になりますが、これからのことということで話をさせていただきます。一つは先ほどのヘーゲルの「世界史の哲学」講義ですが、これか

らいくつかの講義録がドイツで出版されることになります。ヘーゲルが書いたものはドイツで『ヘーゲル全集』として完結し、日本語の翻訳が出版され始めています。その中の一巻は私が責任編集者で、出版まであと3～4年かかると思います。『ヘーゲル全集』の講義録篇はドイツでようやく出版され始めている段階で、これから「世界史の哲学」講義の講義録の翻訳も順次出版されてゆくことになります。そのことによって、これまで流布してきたヘーゲル歴史哲学の一般通念が打破されていくものと期待していますが、この仕事はおそらくこれから少なくとも10年はかかると思っています。

それからもう一つは、世界史という視点で広く世界を見る中で、梅原さんがいち早く西洋から日本に目を向けたように、私もようやく西洋の哲学から日本文化に戻ってきました。そして日本文化の中でも一番の基底にあるのは縄文文化です。縄文時代は一万数千年続いたわけで、そのあとに稲作の入ってきた弥生文化を含めても、今2019年ですから、縄文文化はその何倍も続いていたわけです。この縄文時代では戦争らしいものがなく、そして女性が中心の母権制社会でした。縄文文化特有の土偶というのがありますが、土偶には男の土偶がほとんどなくて基本的には女性の土偶なんです。そこから縄文は女性中心の社会だったという想像がつくんですね。水田稲作の入ってきた弥生時代になってから木をどんどん切り倒して水田にしていくわけですが、縄文時代には水田というものがなかったわけですから、木を多少切って森の中で生活をしていたということです。自然に大幅に手を加えない、まさに自然との共生生活と言えるわけですね。現代人の我々と違って自然の知恵をとにかく持っていたらこうだと思います。食文化についても、山菜やキノコであるとか、穀物も多少取れたし、動物性タンパク質も魚や貝、肉、今でいうジビエなどで多様な食生活をしていたという研究が最近あります。縄文土器を使って、栄養分を非常にバランスよ

く取れていたということです。

日本のどこに行ってもほとんどの地域に縄文遺跡があります。最近もいろんなところが発掘されていますが、特に離島ですね。最近行ったのが淡路島、種子島、それから小豆島です。これから退職すれば時間が自由になりますので、離島巡り、日本列島各地の縄文遺跡の探訪を色々していきたいと思います。ヨーロッパに行く12時間の飛行には耐えられなくなっていますが、日本列島内であれば飛行機でせいぜい2時間飛んで、あとは船に乗ったりレンタカーが借りられますので、そういう形で旅をしていきたいと思っています。

先ほど言いましたように、「愛の哲学」と「生命の哲学」まではやったんですが、これから先は「死の哲学」にだんだん移行していこうかなと最近では思っております。これはまだまだ未完成ですが、入院の体験なども踏まえて「死の哲学」にアプローチして、最終的には〈私〉という一つの原点から、〈私〉の意識と身体との関係、そんなところに「死の哲学」を考えたいと思っています。死の直前に意識が薄れるまでやっぱり哲学しているんじゃないかということで、結論になりますが、「死ぬまで哲学」が私の最後の哲学になるかなと思っております。

以上でございます。拙い話でしたけれどもご静聴どうもありがとうございます。